氏名（本籍）	王　軼群（中国）
学位の種類	博士（人間科学）
学位記番号	博甲第５６号
学位授与年月日	平成３０年９月２９日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学位論文題目	中国における日本語学習者の動機づけに関する研究 ―L2動機づけ自己システム理論の観点から大学生学習者と社会人学習者を対象に―
論文審査委員	主査　東亜大学大学院　教　授　家根橋　伸子
	副査　東亜大学大学院　教　授　具志堅　伸隆
	副査　東亜大学大学院　講　師　麻生　迪子

論文内容の要旨

本論文は，L2 動機づけ自己システム(L2 motivational self system, 以下は, L2MSS)理論の観点から，中国の大学生学習者(日本語専攻大学生)と社会人学習者の日本語学習動機づけの構造及び動機づけの変容のプロセスを考察したものである。

第 1 章では，研究背景として，中国の日本語教育事情について述べ，大学生学習者の動機づけの減退と社会人学習者の意欲の喪失などの問題点をあげた。本研究の目的は，これらの状況の改善を目指して，大学生学習者と社会人学習者の動機づけを明らかにし，中国人に向けた教育方法の開発につながる知見を提供することである。また，論文の構成について述べた。

第 2 章では，先行研究の概観を行った。まず，動機づけの定義を行い，その後，英語習得分野における動機づけ研究の流れについて概観し，本研究で取り扱う L2MSS 理論に基づいた動機づけ研究について述べた。また，日本語教育分野における日本語学習動機づけ研究及び中国における外国語としての日本語学習動機づけ研究を概観し，それらの研究の不足点などをあげた。

続く第 3 章では，先行研究の問題点を踏まえ，本研究の研究課題を設定した。研究課題は以下である。

研究課題

研究課題 1　大学生学習者と社会人学習者の動機づけの構造はどのように異なるのか。

研究 1-1　大学生学習者において，低学年・高学年の動機づけの構造はどのように異なるのか。

研究 1-2　社会人学習者において，短期群・長期群の動機づけの構造はどのように異なるのか。

研究課題 2　大学生学習者と社会人学習者の動機づけの変容のプロセスはどのように異なるのか。

研究 2-1　大学生学習者の上位群・中位群・下位群の動機づけはどのように変容しているのか。

研究 2-2　社会人学習者の上位群・中位群・下位群の動機づけはどのように変容しているのか。

また，研究課題の操作的定義についても記述した。さらに，調査方法及び分析方法について説明した。

第 4 章では，大学生学習者と社会人学習者の動機づけの構造の比較を行った。分析方法としてパス解析を用いた。大学生学習者と社会人学習者をあわせて，中国人日本語学習者とし，パス解析を行った。その結果，①日本語への興味から L2 学習経験を経由し，学習行動が促進される，②動機づけられた学習行動は，道具的動機づけ(促進)からも L2 理想自己を経由し，影響を受けている，という 2 点が明らかになった。

次に，大学生学習者と社会人学習者の動機づけ構造の比較を目的として，多母集団同時分析を行った。そして，大学生学習者と社会人学習者の各変数の差異を確認するために，独立したサンプルの *t* 検定を行った。その結果，以下のことがわかった。①大学生学習者は，社会人学習者より道具的動機づけ(予防)の値が高いが，L2 理想自己，L2 義務自己，L2 学習経験，動機づけられた学習行動の変数の平均値においては，社会人学習者の方が高い。②道具的動機づけ(促進)が L2 理想自己に与える影響と日本語への興味が L2 学習経験に与える影響という 2 つの影響関係においては，大学生学習者は社会人学習者より強い傾向があることが示された。

第 5 章では，学習歴による大学生学習者の動機づけの構造の差異を明らかにする目的で，多母集団同時分析を行った。その結果，次の 3 点が明らかになった。①低学年と高学年では，L2MSS の 3 要素が学習行動に与える影響が変わっていない。②低学年と高学年では，影響要因が 3 要素に与える影響が変わっていない。③全てのパス係数の値は，変わっていない。そして，低学年と高学年の各変数の差異を明らかにするために，独立したサンプルの *t* 検定を行った。日本語への興味，道具的動機づけ(促進)，L2 理想自己，L2 義務自己，L2 学習経験，動機づけられた学習行動の値は，いずれも高学年のほうが低い。この結果から，学習歴の増加につれて大学生学習者は動機づけが落ちたことが示された。

第 6 章では，学習歴による社会人学習者の動機づけの構造の差異を明らかにすることを試みた。第 5 章と同じ方法により，短期群と長期群の動機づけの構造を比較した。その結果，次のことが明らかになった。①道具的動機づけ(促進)が L2 理想自己に与える正の影響は，短期群のほうが強かった。②道具的動機づけ(促進)から動機づけられた学習行動へのパスは，短期群のみ有意であった。③日本文化への憧れが L2 理想自己に与える正の影響と L2 学習経験が動機づけられた学習行動に与える正の影響は，長期群のほうが強かった。④L2 理想自己から動機づけられた学習行動へのパスは，長期群のみ有意であった。

第 7 章では，大学生学習者の動機づけの変容のプロセスを明らかにするため，2 年間にわたり，計 4 回の半構造化インタビュー調査を実施した。その後，SCAT(Steps for Coding and Theorization)を用い，分析した。学習成果別により，上位群，中位群，下位群に分け，3 つのグループの大学生学習者の動機づけ(L2MSS の 3 要素)の変容のプロセスを考察した。その結果，次の 4 点が明らかになった。①大学生学習者の上位群と中位群では，L2 義務自己が L2 理想自己に影響を与えていた。下位群の L2 義務自己は，L2 理想自己の発達に影響を与えなかった。②上位群と中位群の留学志向という理想自己は，学習環境を留学先に変更させた。即ち，L2 理想自己が L2 学習経験に影響を与えた。③下位群では，身分による義務感が学習体験にマイナスの影響を与えたことが報告された。④3 つのグループにおいて，テストや教師や学年の増加などの学習環境は，L2 義務自己に影響を与えていることが見られた。特に，テストが L2 義務自己を喚起し，学習意欲に大きな影響を与えた。

第 8 章は，第 7 章と同じ手法で，社会人学習者の動機づけの変容のプロセスを分析した。社会人学習者の 3 つのグループの L2MSS は，大学生学習者同様，3 要素から構成されていた。調査の結果，次の 4 点が明らかになった。①経済的余裕がある社会人は，全員日本旅行などの生活面の L2 理想自己がイメージできていた。②3 つのグループで

は，他人の期待に応える L2 義務自己が存在しない時が多かったが，目的を達成するという自己に由来する義務自己が見られた。③上位群は，現実的 L2 理想自己を基準とした自己実現の計画を立て，その計画に従い，環境の改善を求めることが伺えた。下位群は娯楽などの生活面における L2 理想自己を持っており，日本旅行といった学習経験を積み重ねていた。④中位群は，同僚からのプレッシャーという L2 義務自己で，できるだけ日本語を使うようにしているという学習経験を積み重ねていた。⑤3 群ともに，テストが学習意欲に影響を与えていた。

第 9 章は，第 4 章から第 8 章でなされた量的･質的分析の結果に基づき，2 つの研究課題について，考察を行い，理論的，教育的示唆を探った。

研究課題 1 の答えとして，次の共通点と相違点がある。

共通点

①2 集団ともに L2 学習経験が動機づけられた学習行動に与える影響は，L2 理想自己より強い。また，L2 義務自己は学習行動に影響を与えなかった。

②日本･日本人へのイメージ，日本文化への興味，日本語への興味，他者からの影響，道具的動機づけ(促進)の変数の平均値には，差がなかった。

相違点

①道具的動機づけ(促進)が L2 理想自己に与える影響と日本語への興味が L2 学習経験に与える影響は，大学生学習者の方が強い。

②大学生学習者は，社会人学習者より道具的動機づけ(予防)の変数の平均値が高い。

③L2 理想自己，L2 義務自己，L2 学習経験，動機づけられた学習行動において，大学生学習者は，社会人学習者と比較するといずれも低い。

研究課題 2 の答えとして，次の共通点と相違点がある。

共通点

①社会人学習者の上位群と大学生学習者の上位群は，L2 理想自己の達成後，意欲が減退した。

②大学生学習者と社会人学習者の上位群は，ともに人的環境からマイナスの影響を受けていないことが示された。

③大学生学習者と社会人学習者において，テストが L2 義務自己を喚起し，学習意欲に大きな影響を与えたことが見られた。

相違点

①低学年の大学生学習者と下位群の大学生学習者は，想像的な L2 理想自己を持っているのに対し，社会人学習者は現実的なものが多い。

②大学生学習者の L2 義務自己は，常に存在している。しかし，大部分の社会人学

習者の動機づけの変容のプロセスにおいては，L2 義務自己が一時的に喪失したことがある。

上記の結果を踏まえ，本研究は，大学生学習者の動機づけと社会人学習者の動機づけを明らかにした。理論的な考察を行い，次の 2 点を主張した。①集団の社会文化としての L2 学習経験が学習行動に与える影響の検討の必要性，②メンツ文化から L2 義務自己の再定義の必要性という 2 点を主張した。また，この主張を生かした教育的示唆を行った。具体的には，L2 学習経験の重視(評価方法の多様化など)と L2 理想自己の活用(相互協調的 L2 理想自己の活性化など)である。

第 10 章は，本論文の要約を行うとともに，理論的貢献と資料としての意義を述べた。本研究の理論的貢献は，以下である。

①中国人日本語学習者を対象に，従来，扱われなかった L2MSS 理論の有効性を検討した。特に検討されることが少ない L2 学習経験の役割を詳細に考察した。
②L2MSS 理論の検討にあたって，文化的自己観の視点を入れる必要性を示唆した。

資料としての意義は，以下の 2 点がある。
①中国で増加している社会人学習者の動機づけの理解と把握のためのデータを具体的に提供した。
②大学生学習者と社会人学習者の動機づけ構造･変容のプロセスを明らかにした。
中国における日本語学習動機づけ研究に新なる知見を提供し，日本語教育現場で，学習者の動機づけを高めるために，何をしたらよいかを示した。

最後に本研究の限界点を記述し，今後の課題を述べた。

論文審査の結果の要旨

王軼群氏による学位審査請求論文に対する本審査会を，上記の審査委員の内2名及びオブザーバーとして東亜大学大学院総合学術研究科人間科学専攻主任・古川智教授にご出席いただき，平成30 年8月18日10:00～11：00 に開催した。冒頭約40分で事前査読に対する修正の報告と論文要旨の説明を王氏が行い，その後に論文内容についての質疑応答を約30分間行った。論文審査員から複数の質問がなされ，それらに対して適切な回答が王氏からなされた。その後，合否判定を審査委員間で行った結果，審査委員会として「合格」の判定を下した。同日13:35 に開催された公聴会において発表が行われ，公聴会参加者から複数

の質問がなされ，それらに対して適切な回答が王氏からなされた。公聴会終了後，合否の議論を専攻教員間で行った結果，人間科学専攻の総意として「合格」の判定を下した。なお，審査会においては，審査委員の査読にて研究背景，分析方法，調査対象者，章立て，社会人学習者の動機づけの維持に関する考察において不明瞭な点が指摘されていたが，修正がなされ，適切に修正されたことが審査委員として確認された。

主たる審査会の内容は以下の通りである。

1. 審査委員より，緻密に計画・実施された研究により新たな知見が得られており，研究の
レベルとして，博士論文として認めてよいレベルにあるという評価を得た。しかしながら，論文中の日本語表現は，博士論文としての価値を損なうものではないが，不適切な点が散見しており，十分な修正が必要である。

2. 研究方法の記述（第3章）において，質問がなされた。本研究は，量的研究（研究課題1）と質的研究（研究課題2）を統合して検討する混合法を取っているが，研究課題1における質問紙作成のための予備調査として行ったインタビュー（質的データの収集）をも質的研究と位置付けるのは，不適切ではないかという質問が審査委員よりあった。審査委員の指摘を受け，予備調査をも質的研究とする記述を削除し，研究課題2の質的調査のみを本研究における質的調査とし，先行研究と整合性をとったことが確認された。

3. 本研究は第7章と第8章の分析から，Markus & Kitayama（1991）を踏まえ，L2自己が4つに分けられることを主張したが，具体的な例が示されていなかった。修正にあたり，
具体的な例を示し，分析に説得力を持たせたことが報告された。今後は，このような自己
観が実際の学習行動にどのように反映するのかを実証する必要があるだろう。本研究が示した課題は動機づけ研究に文化心理学的観点を導入する必要性であり，実証されたならば，それは革新的な成果となる。

以上